

Title	新しく創られた現代的な祭りの社会心理的機能－ YOSAKOIソーラン祭りのケース・スタディー
Author(s)	和泉, 佳奈子
Citation	
Issue Date	2002-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/354
Rights	
Description	Supervisor:梅本 勝博, 知識科学研究科, 修士

新しく創られた現代的な祭りの 社会心理的機能

－YOSAKOI ソーラン祭りのケース・スタディー－

和泉 佳奈子

北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科

2001年3月

キーワード：YOSAKOI ソーラン祭り、居場所、選択縁、自己実現、社会心理的機能

「祭りというものは何よりもまず、集団的な興奮の絶頂であり、群衆を誘引して引きつけるものである」(カイヨワ 1974)。それは、祭りがその本質において、人々を集め、高揚させ、融合する機能をもつからであろう。

確かに「祭り」はいつも社会に存在した。しかし、いつの世にも祭りが人々を魅了してきたわけではない。日本において高度経済成長期にあたる 1950 年代半ばからの 10 年間に姿を消し、また簡素化された形でしか存続できなくなった地域の伝統的な祭りは数多い。その原因は、祭りを執り行っていた地域社会の崩壊である。そして地域社会を壊しながら経済的に豊かになった日本は、一方でより忙しく働く人々を創り出し、他方で多くの人々に「余暇」をもたらして職場単位や行政単位のイベントが一時的に増加した。しかし、その多くは長期的には吸引力を持たず、次第に人々の関心は家族や友人に向いてきた。

ところが近年、その傾向に変化が見られるようになった。ボランティア人口の増加に見られるように、人々が積極的に社会に進出し始めたのである。本研究で取り上げた「YOSAKOI ソーラン祭り」という現代的な祭りの成功もその一つの現れであろう。1992 年に札幌に誕生した YOSAKOI ソーラン祭りは、確かに多くの人々の心を虜にした。そして昨年は、観客動員数 201 万 3 千人、踊り子数 4 万 1 千人という過去最高の記録を更新した。誕生してわずか 10 年という短い年月の中で、今年で第 53 回を迎える「さっぽろ雪まつり」に匹敵する程までに成長したのである。

本研究は、その「YOSAKOI ソーラン祭り」のケース・スタディーである。加入も脱退も本人の自由という「選択縁」の特徴をもった現代的な祭りに、彼らは何を求めて参加し、その欲求は満たされたのか、が考察の焦点である。本研究のメジャー・リサーチ・クエスチョンは、「YOSAKOI ソーラン祭りがもつ社会心理的機能とは何か」で

あり、それを明らかにするためのサブシディアリー・リサーチ・クエスチョンが、1) 踊り子として祭りに参加しているのはなぜか、2) 観客として祭りに参加しているのはなぜか、3) 踊り子をやめるのはなぜか、の3つである。

これらのリサーチ・クエスチョンに対して、先行研究のレビューから得られた主な知見は、祭りとは人を引きつけるものであり（カイヨワ 1974）、社会は自己を維持・存続させるために祭りを必要とする（森 1999）ということである。しかしそこには、いったい個人が何を求めて参加したのか、という視点が欠けている。YOSAKOI ソーラン祭りには、既存の「祭り」から離れ内に閉じこもりがちになった人々を再び引きつけた機能があるはずである。

本研究では、そこで、YOSAKOI ソーラン祭りに実際に参加し、自ら踊り子となり、また企画運営にも携わって参与観察をおこなった。また踊り子 477 人と観客 406 人の計 883 名に対してアンケート調査を実施してデータを収集した。これらのデータを分析した結果、YOSAKOI ソーラン祭りの社会心理的機能は、自己実現の欲求を満たす「居場所」の提供であることが明らかになった。「居場所」とは、我々が生活を営む上で意味付与と関わる「場」（社会的空間）である（三本松 2000）。つまり、そのような機能をもった「祭り」であるが故に、現代社会において広く受け入れられたのである。実際、踊り子の多くは、血縁、地縁、社縁における「居場所」にほぼ満足していた。そして、その満足がマズロー（1987）のいう新たなより高いレベルの欲求を生み、「新しいことに挑戦したい」という思いとなり、YOSAKOI ソーラン祭りに参加していた。すでに「居場所」をもっていた踊り子に祭りが提供したものは、自己実現の欲求を満たす「居場所」となったのである。また踊り子は、YOSAKOI ソーラン祭りに関わることで、しだいに自らの欲求が満たされ、YOSAKOI ソーラン祭りへの関心が薄れてくる。それと同時に YOSAKOI ソーラン祭り以外のことへの関心が高まる。その時、YOSAKOI ソーラン祭りは彼らにとって「居場所」ではなくなり、それが YOSAKOI ソーラン祭りからの「卒業」となる。一方、観客には YOSAKOI ソーラン祭りの踊り子になるまでもなく、確固たる「居場所」が存在していたので、彼らは観客として祭りに参加していたのである。

そして以上のことから以下のことが推測される。第一に、現代社会には「自己実現」の欲求を満たす「居場所」を求めている人が多く存在する。第二に、それらの欲求を満たせる場には人が主体的に集まる。そして第三に、その様な場を社会に新しく創り出すことが可能なのである。また、将来的にどのような場が社会に望まれるのかを、「自己実現」と「居場所」という視点から考えると、次の三点が考えられる。第一に、現実世界での人と人が直接接触する場であること。第二に、選択縁における自己実現の場であること。第三に、文化を軸とした場であること。以上を考慮に入れることが、社会により貢献できる「場」づくりのために必要である。